

長谷川亮介 学位論文審査要旨

主査	藤原義之
副主査	植木賢
同	磯本一

主論文

Characteristics of advanced colorectal cancer detected by fecal immunochemical test screening in participants with a negative result the previous year

(前年度陰性者のうち、免疫学的便検査スクリーニングで発見された進行大腸癌の特徴)

(著者：長谷川亮介、八島一夫、池淵雄一郎、佐々木修治、吉田亮、河口剛一郎、磯本一)

令和 2年 Yonago Acta Medica 63巻 63頁～69頁

参考論文

1. ピロリ菌感染を考慮した胃がん検診の取り組み：鳥取県・伯耆町における試み

(著者：八島一夫、長谷川亮介、謝花典子、河口剛一郎、磯本一)

令和元年 日本消化器がん検診学会雑誌 57巻 561頁～570頁

審査結果の要旨

本研究の目的は、前年度検診陰性であり当該年度検診陽性で発見された進行大腸癌（陰性進行癌）の特徴を明らかにすることである。結果、陰性進行癌では、3年以上大腸がん検診を受けておらず当該年度検診陽性で発見された進行大腸癌に比べ、右側結腸癌の頻度が高く、免疫学的便潜血検査（fecal immunochemical test: FIT）は右側結腸癌発見には十分な精度でないことが確認された。また、陰性進行癌では右側結腸癌の頻度のみならず、女性の頻度も高く、これまでに報告されている、検診と検診の間に発見される中間期癌の特徴と類似していた。将来的には、FITと内視鏡検査を組み合わせるなど、右側結腸癌に対して感度の高いスクリーニング方法の構築が必要であると考えられた。本論文の内容は、FITの欠点を指摘することで、大腸癌のスクリーニング法の改善の必要性を示唆するものであり、明らかに学術水準を高めたものと認める。